はブライアン・ガロファロが弾いてくれた。ありがとう、おやっさん。手拍子はジェリーと僕が叩いて、ジョン・ホップスがキーボードを演奏した。歌詞を手に入れてから僕はヴォーカル・パートを歌い、ストリング・アープ（訳注：アメリカにあった電子楽器メーカー、Arp Instrumentsのシンセサイザー「ストリング・アンサンブル」）を演奏し、手拍子もたっぷり叩いた。ストリングスはボブ・アルシヴァーが担当し、ゴルフ帽をかぶったジム・ハース、ジョン・ジョイス、僕、ブルースが後にバッキング・ヴォーカルを吹き込んで、それを後で聴いたリッキーが元気になってタンバリンを入れてくれた。彼っていい奴だよ。

♀ A FOOL IN LOVE

日焼け止めオイルを塗ったり、声を思い切り出したりする合間に、ハワイでビルと一緒に書いた曲だ。実はフックの部分は、僕が前回イングランドに行った時に借りていたフラットで、ひどく調子外れなアップライト・ピアノを弾いて生まれた物だ。ブリッジのメロディと歌詞の一部は、約1週間後、パリのホテルのだだっ広いスイートで、同じように調子外れな「ルイ何とか」っていうピアノで仕上げた。確か、ベッドルームが見つけられなくて、そのピアノの下で一晩寝たことがあったと思う。それはさておき、数ヶ月後、僕がピアノを弾いて歌い、ブライアンがベース、リッキーがドラムをそれぞれ演奏している時に、スティーヴが懐かしのトミー・ジェイムズからパクったようなギターを弾いた――僕らの意識状態から判断して、それはあり得ない音だった。でもビルは何でもユーモアとして受けとめられる人だから、何も言わずにギターを弾くことにして、古いテレキャスターを引っ張り出し、ブリッジのエレキ・パートを演奏してくれた。リッキーと僕がバスドラとスネアを叩いてちょっとした色合いを加え、他の連中はいつも通りに演奏した。その後、ヴォーカルをオーヴァーダブし、ブルースがアレンジしたフェード部分のハーモニーをリッキーとジェリーと僕が歌った。これは、僕がソロ演奏に取り組んだ唯一の曲だ（不完全だけど）。チャンスが訪れたと思ってストラトを取り出すたびに、僕はスティーヴかビルの方を見て、黙り込んでしまう。あるいは彼らが言うところの「乾杯」をしてしまう。まあとにかく、この曲はちょっと混乱してしまうぐらいに真っ直ぐな歌で、僕としては81点をあげたいと思う。曲に合わせてガムを噛むのにちょうどいい素敵なビートもあるしね。

♀ TOMORROW

さて、どこから話そうか。まず、素晴らしい歌を書いてくれたポールとリンダ、そして、この曲をカヴァーするだけのセンスの良さを持ち合わせていなかった他のすべてのアーティストにも感謝したい。この曲を録音した夜に初めて、僕らはバンドとして一つになれたんだと思う。それは僕にとって、ものすごい旅を終えたように感じられる出来事だった。それまでは優れたスタジオ・プレイヤーになることと、次のセッションに時間通りに現れることが最大の関心事だというような5人の男たちを雇って、スタジオでの人生を過ごしていただけだったからね。曲はまず2つのパートに分けて録音され、別の日の午後にミドル・セクションを仕上げた。最初と最後のパートの演奏者は以下の通りだ：ドラムはリッキー・ファター（"この肩を見てくれ"ドラマー）、ベースはブライアン、ロス・ギターラ・エレクトリカはビル（ハウス）、タックピアノ（訳注：ハンマーの先に画鋲や釘などをつけて、より打楽器的な音が出るようにしたピアノ）は僕、ピアノはジョン・ホップス、エレキはスティーヴ。オーヴァーダブは、僕の記憶が正しければリッキーとビルが担当して、僕とブライアンとジョンとビルが手拍子を叩いた。

♀ BREAKIN' DOWN AGAIN

このアルバムの中で一番始めに録音した曲だ――とても遠い昔のことで、まだヒゲも剃っていなかった頃だった気がする。ヴォーカルを除いて、すべてライヴ録音したんだ。ヴォーカルは数ヶ月後に、やはりワンテイクで録音した物だ。まあとにかく、バンドとストリングスを合わせて36個のピースを、古き良き時代に一つの曲を作っていたようなやり方でまとめたんだ。時代は変わっても人の心に変わりはないだろう？　その晩、完成した曲を聴いてみると実に活き活きしていたから、僕らは大いに喜んだ。僕が書いた曲としてはベスト・ソングかもしれないという噂が流れた。また、RCAの社内では、ビルの最高作かもしれないという噂が流れていた。実は僕らは、前回のアルバムのバッキング・ヴォーカル・セッションの休憩中に、一緒にこの曲を書いたんだ。あのアルバム、みんな覚えてるよね？　僕がキーボードの前に座って曲のアイデアを練っていると、ビルが本当に何気ない感じでやって来た。それが彼のスタイルでね。そして二人で書き上げたんだ。僕がヴォーカルを思いつくと、彼が8小節を書いてくれた。今までで一番簡単に書けた曲だったね。すぐにデモ演奏してみたんだけど、前のLPのコンセプトには合わなかったからキャンセルしたんだ。でも二人とも、即座にノックアウトされていた。あの時点ではまだあまり一緒に曲を書いたことがなかったんだけど、あの晩、あんなにも楽に書けたから、それからは一緒にたくさん書くようになったんだと思う。元々はビルがハーモニーの一部を歌うか、あるいはデュエットのような形でヴォーカルの片方を担当するはずだったんだけど、グロリア・グライネルみたいな高音を出すことは二人ともできなかったんだ。彼女には感謝しているよ。ソウルがあるしね。それに、約4ヶ月間行われた前回の派手なショーで一緒にロードに出て歌っていたから、ぴったり呼吸を合わせて歌うことができたんだと思う。仲のいい人と一緒に歌う方が楽なんだよ。相手が可愛ければ特にね。「その調子だ、ダーリン」みたいな感じで。ここでも素敵なストリング・アレンジをしてくれたボブ・アルシヴァーに、再び感謝。素晴らしいよ、まったく。

♀ RUN AND HIDE

これもある晩、ハワイのミュージック・ルームで書いた曲で、翌朝ビーチで日なたぼっこしていたビル（やっぱり寝ていた）に出だしの"Ain't no gettin' around it baby"という部分を歌って起こしてやったんだ。そしてその晩、一緒に仕上げたんだよ。